

没後30年 色あせぬ魅力

流山で公開講座

映画「男はつらいよ」の主人公「フーテンの寅さん」として愛された俳優の渥美清さん（1928～96年）が68歳で亡くなって4日で30年がたった。色あせない魅力に迫る公開講座が同日、県生涯大学校東葛飾学園（流山市）で開催。江戸川大教授で喜劇史研究家の西条昇さん（62）が講演し、「類いまれな喜劇俳優。渥美が、あれほどすごい喜劇俳優だったから寅さんシリーズは生まれた」と断言した。

（林容史）

寅さんを生きた渥美清さん

絶妙アドリブ「類いまれな喜劇俳優」



浅草芸能大賞を受賞し、喜びを語る俳優の渥美清さん＝1989年3月、東京都台東区の浅草公会堂で

渥美清主演、山田洋次原作・脚本・監督で1969年に第1作が公開された。露天商を稼業とする車寅次郎が故郷の東京・柴又に戻ってき

ては騒動を引き起こす。旅先や柴又で出会うマドンナにほれるものの、恋は成就しない。全48作は1人の俳優が演じる映画シリーズとして世界最長。「寅さん」として日本中から親しまれた渥美さんは没後の1996年に国民栄誉賞受賞。

用語解説



渥美清さんについて講演する西条昇さん＝流山市で

「『没後30年』渥美清が『寅さん』になるまで」と題した公開講座は、同校の学生や市民ら約120人が参加した。渥美さんは現在の東京・上野に生まれ、幼少期から浅草の喜劇の舞台が好きだったという。露天商の手伝いもして、西条さんは「現実でも寅さんを生きていた」と話した。喜劇を楽しむ客が減り、劇団が消えていく中、渥美さんも浅草などのストリップ劇場でコメディアンとして修業を積んだ。肺結核で倒れたのを機に、舞台から映画に軸足を移し、俳優の森繁久弥さんを目標にしていたという。63年の主演映画「拝啓天皇陛下

様」で俳優の地位を確立した。68～69年、渥美さん主演、山田洋次さん脚本でテレビドラマ「男はつらいよ」が放映された。最終回、寅次郎が奄美大島でハブにかまれて死ぬと視聴者から抗議が殺到、山田さんは「罪滅ばしに映画で生き返らせた」という。西条さんは「東大法学部出身ながらとぼけた山田監督と、渡世人でインテリの一面もある渥美、2人の個性がうまく重なった運命の出会いだった」としみじみと語った。東京・飯田橋生まれの西条さんは、6歳の時に両親に連れられ、名画座で初めて「男はつらいよ」を見て以来の寅

さんマニア。88年公開のシリーズ40作目「寅次郎サラタ記念日」では念願の共演も果たした。西条さんは、作品の魅力を「マドンナにひと目惚れし、大人なのに子どもっぽいわがままを通していざこざを起こす。子どもや外国人が見ても楽しめる普遍的な喜劇」と指摘する。渥美さんの演技について「小さな目を泳がせて心理状態を表現する繊細さがあった」と解説。露天商が切るたんかなどに触れ、「役柄やストーリーを壊さずアドリブを入れていた。喜劇俳優じゃないとできない技」と感服する。